

Frost, Samantha, 2011, "The Implications of the New Materialisms for Feminist Epistemology," Heidi E. Grasswick ed., *Feminist Epistemology and Philosophy of Science: Power in Knowledge*, Springer: 69-83.

サマンサ・フロースト, 2011, 「新唯物論がフェミニスト認識論に示唆するもの」

※ () の数字はページ数を表す。

レジュメ作成者による紹介文

Samantha Frost はイリノイ大学 Political Science, Gender and Women's Studies 教授で、専門は政治理論、新物質論およびフェミニズム理論である。

本論文は、Heidi E. Grasswick 編 *Feminist Epistemology and Philosophy of Science: Power in Knowledge* に第 4 章として収録されている。本稿で筆者は、新唯物論 new materialism の概要を解説したうえで、それがフェミニスト認識論にとって有益であることを示している。

1. 導入 (69-71)

- フェミニストの哲学者や理論家の分析において、生命体としての身体 the body as a living organism は、悩ましい対象であり続けている。
 - このような状況において、Anne Fausto-Sterling (2005) の提言は挑発的である。彼女は、人間の骨のミネラル含有量が、ジェンダー化された文化的実践と性内分泌学との相互作用によってどのように形成されるかを詳述した最近の論考で、「身体を、文化や歴史によって構成されるのみならず、遺伝子、ホルモン、細胞、器官によって同時に構成されていることを受け入れる」ようフェミニストに呼びかけた。
 - Fausto-Sterling は、生物学を知的に考察することを提案し、また、これまでのフェミニスト的批評を構成してきた因果関係に関する前提を再考するよう迫っている。
- とはいえ、身体の物質性に学術的・理論的に焦点を当てることは何も新しいことではない。数十年前からフェミニストたちは、言説分析を通して、身体性と物質の両方を脱自然化 denaturalize してきた。このような研究の焦点は、規範や権力関係が主体性 subjectivity の形態として組み込まれ、制度や文化的実践、事実の中に具体化される過程を解明することにあつた。
 - しかし新唯物論者たちは新たに、物質や生物に特有の動き、力、過程を分析の射程に収めようとしている。新唯物論者は、物質や身体を、言語、文化、政治の力によって構成されるものとして捉えると同時に、それらを形成的 formative なものとして考えている。つまり、物質や身体は人間の意図から直接的に生まれるものでも付随的に生まれるものでもなく、むしろそれ自身の原動力や独特な種類のエージェンシー agency を持っているとして捉えられる。
- 新唯物論者は、生物学および物質的なエージェンシーを分析に導入しようとする際、

身体性や物質に対する社会的・政治的な分析を放棄するようフェミニストに提唱しているわけではない。それどころか新唯物論者は、生物学的本質主義の政治的悪用について警鐘を鳴らしている。

- たとえば、ダーウィンの『進化論』を批判的に再読した Elizabeth Grosz によると、フェミニストは文化によって身体がどのように記述されるかに関心を持っているからこそ、「記述することが可能な身体とは何か」についても問う必要がある (Grosz 2004: 2)。
- 新唯物論者は、物質の力と有機的な生命のプロセスが、いかにして権力の作用に関与し、あるいは権力に抵抗する要素や様式を提供するのか探求する。
- 新唯物主義は、社会的・政治的現象に関する文化的・言説的分析を、生物学的・物理的・化学的プロセスに関する科学的洞察をもって補完しようとする試みであり、学際的なフェミニスト研究において刺激のかつ挑発的な展開として捉えられるだろう。しかしこのプロジェクトは、生物学に基づく本質主義的な性差別に対抗しようとしてきたフェミニストたちに対して警戒感を与えるものである。
- しかし、新唯物論者が引き起こすのは、本質主義の問題ではない。新唯物論者は、身体のエージェンシーが権力の作用として理解される枠組み、すなわちエージェンシーに関する一方向的な説明から、文化と生物学が相互に作用し合う効果を持つ枠組みへと、フェミニストの批判分析を転換することを目指している。
- 新物質論者は、物質と生物学がそれ自体で作用することを強調する。そして、文化か生物学のどちらかが身体を規定するという一方向的な因果関係のモデルを放棄し、代わりに因果関係を複雑で再帰的、かつ多重的に考えるモデルを採用する。

2. 実体二元論および史的唯物論との比較 (71-74)

- 新唯物論の主張を理解するためには、物質についての議論を展開するその他のアプローチとの比較が役立つだろう。ここでは、物質を本質的に不活性な inert ものとして考える René Descartes の実体二元論と、物質を人間の労働や文化的実践によって変化するものとして理解する史的唯物論を取り上げる。
- Descartes にとって、物質は受動的なものであり、物理的な因果法則に従うものである。このような物質に対する考え方は、思考する自己は非物質的な存在であり、具象化された物質的存在とは存在論的に異なるという実体二元論の中心をなしている。この枠組みによれば、思考は純粋に理性的な知的活動であり、身体の刺激や覚醒とは対極にあるものである。
- フェミニスト研究者が指摘するように、物質の受動性に関する Descartes 的な理解は、人種、ジェンダー、階級に関する用語で図式化され、その結果、人種、ジェン

ダー、階級に関する差別を正当化するために利用された。

- ◇ 女性、労働者階級、外国人は、身体的作用から距離を置きながら自らの行動を合理的に操ることができないものとしてみなされ、その結果彼ら彼女らは、身体によって支配されていると解釈された。
- フェミニストは、このような図式の歴史的・思想的な基礎を明らかにしただけでなく、ある特定の階層の人間が生まれつき非合理的で、身体や感情に縛られ、社会的な圧力に対して脆弱であるという推定を示し、その推定のもとで維持されてきた権力関係や制度を追跡してきた。しかし、新唯物論者にとっては、このような「他者」の合理性を主張し、肉体の情動や現象学的経験を再評価するだけでは十分でない。新唯物論者は、物質が受動的で思考を持たないという概念そのものに挑戦する。
- 史的唯物論者にとって物質は、Descartes の二元論に比べてより可塑的なものとして捉えられる。
 - Karl Marx は『ドイツ・イデオロギー』の中で、人間は物質世界と親密な関係にあることを示唆している。人間の思考と経験は、自らが自分や他人の目的のために物質に働きかける活動によって、形成・変化する (Marx 1978, 150)。しかし、人間と人間が働きかける物質との間の相互形成的な関係において、人間は完全に自己を支配できるわけではない。マルクスが資本、商品、および生産活動を通じて生じる社会的・政治的関係に関する分析において述べているように、労働の産物は、個人の行動を指示し、拘束し、強制する経済的・政治的構造の構成要素になる。言い換えれば、物質が人間の労働によって加工され、変化するとき、物質は人間の代理人となり、各人の意図的な思惑を超えた形で、個人のエージェンシーを吸収しそれを変換することができる。
 - ◇ 構築主義者たちは、史的唯物論を用いて、物質に対する人間の活動の創造的かつ拘束的な力に関する分析を行ってきた。史的唯物論に基づく構築主義的な見解において、物質のエージェンシーは、意図的な人間の活動から派生するものとして捉えられる。一方で新唯物論者は、人間の活動とは無関係に存在する物質のエージェンシーについて探求する。

3. 新唯物論における懸念 (74-77)

- 新唯物論者は、物質が人間のエージェンシーを受容することによってのみエージェントとして機能するという図式に対抗することを目的とし、物質や生物学に特徴的なエージェンシーを特定することを試みている。
- しかし、新唯物論者の挑戦において2つの懸念が存在する。
 - 第一に、物質あるいは身体について一意的あるいは一般的なものとして語るこ

は、物質や身体に関する多様で歴史的に特異な構成要素を覆い隠し、そこから生み出される権力関係を不明瞭にし、さらには永続させることになる。

- 第二に、新唯物論者が物質や身体に特異なエージェンシーを考察しようとするあまり、意図的であろうとなかろうと、実際には社会的・歴史的な現象を生物的・生理学的・自然現象として誤って表現してしまう可能性がある。そのような誤った表現は、ジェンダーや人種を本質化するという問題を引き起こす。
- こうした懸念は、極めて重要なものである。しかし、Susan Oyama が指摘するように、現実に対する懐疑と本質主義への不安は、時に知的探求の道を閉ざす「罨」として機能する。
 - フェミニストの科学者や科学史家は、自然環境や生物学的プロセスが社会的・文化的な要素によっていかに形成されているかを示すことで、自然と文化という現代の二項対立を打破する素晴らしい仕事を成し遂げてきた。しかし、非科学的なフェミニストたちは、生物学や物質性を、歴史的に特異な産物としての言説的形成物以外の何ものでもないと考えている。Lynda Birke が挑発的に指摘しているように、遺伝学や生殖の科学を批判的に扱う学者たちでさえ、言説的な分析を精緻に行う一方で、「自分自身を忙しなく再構築している」「肉」を忘れてしまうことがある (Birke 2000: 145)。
- このような物質に関する考察に対する消極性は、フェミニストたちが脱構築してきたはずの二項対立的な因果関係の理解によって構造化されている。
 - 第一に、西洋のフェミニスト認識論者は、身体的差異に帰属するあらゆる社会的・政治的意義は社会的・政治的構築物であるという議論に同調してきた。この背景にあるのは、性的あるいは人種的差異が特定されれば、それを根拠として不条理な社会政策や政治関係が生み出されるかもしれないという懸念である。この懸念に拍車をかけているのは、因果関係は単線的かつ一方向的なものでしかありえないという仮定であり、ここでは生物学と文化のどちらか一方が社会現象の原因として捉えられる。
 - ◇ このような因果関係の枠組みのなかで、生物学に何らかの作用があることを認めることは、ジェンダーや人種の構築性を放棄することを意味する。「本質主義のリスク」という懸念の根底には、逆説的に、物質的・生物学的なエージェンシーが文化や政治の影響を覆し圧倒するため、我々がどのような努力をしても、結局は物質的なものが我々の生活を規定してしまうという推定がある。
 - 上記と関連して第二に、フェミニストが生物学から離れ、身体性の文化的、言語的、あるいは言説的形成に焦点を当てるようになると、秩序・意味・行為の決定的な担

い手として、人間が再定位される (Smith and Jenks 2005: 147)。

- ◇ 生物学的決定論を回避するために文化に目を向けることによって、フェミニストは自由・自律性・自己決定といった近代の幻想を再現している。つまり本質主義に対する懸念は、Descartes 的な二元論の条件によって形作られており、存在論的分裂の一方に理性・自由・エージェンシーを、もう一方に物質・受動性・決定論を配置する。

4. 新唯物論が示唆するもの (77-80)

- 物質と身体性を再認識することを目指す新唯物論は、単一方向的で単純な因果関係のモデルを再考するための示唆に富む出発点を提示している。
- フェミニストたちは、物体や生物を構成する動的な相互作用の過程をたどるなかで、自然に対する文化の作用と、文化に対する自然の作用の両方に注目していると主張する。しかし、このような形で問題を提起すること、つまり、互いに異なる実体としての完全性を維持しながら関係性の中で相互作用するかのように考えることは、この関係における相互変換的な性質を捉え損ねている。
 - ・ 「生物と環境の相互依存性」に注目すれば、「生物とその環境は、互いに関連する側面を規定し、互いに影響を与え合う」ことが解明されるであろう。Elizabeth Grosz は、「生物学は社会生活、政治生活、個人生活を制限しない。生物学はそれらを可能にするだけでなく、それらが際限なく変容し、その結果、生物学がさらなる変容を遂げるよう促進する」と述べる。
- 単一的、直線的、単方向的な因果関係のモデルは、新唯物論者が強調するような相互作用における変容、発展を捉えきれない。新唯物論者が提示する生物、物体、環境を構成するダイナミックな相互作用のプロセスは、フェミニストたちに、因果関係の複雑さについて語るための理論的語彙を開発することを要求する。
- そして最後に新唯物論者は、複雑な因果関係や相互依存関係に着目することを通して、知識の限界に焦点を当てることになる。
 - ・ 新唯物論者にとって、物体は常に動的な「集合体」とつながりの中に存在し、それが物体のあり方や動き方に影響を及ぼしている。したがって、物体を境界のある別個のものとして、つまり、他の物体や人間から切り離されて存在するものとして考えることは意味をなさない (Bennett 2004: 365)。
 - ・ 実際、新唯物論者は、物質と生物のエージェンシーと相互依存性を認めることで、重要な認識論的不可能性、つまり、複雑な因果関係のプロセスを完全かつ予測的に知ることは不可能性に直面していることに気づいている。ここで問題となる複雑

な因果関係は多方向かつ再帰的であるため、多様な相互作用要素は、「個々の構成要素内では・・・明白でないような集合的特性やパターンを・・・『自発的に』生み出す」(Urry 2005: 5)。

- このような複雑な相互作用の不可逆性は、Monica Greco が示唆するように、「将来の知識に先送りできない無知の形態の可能性を認め、評価することを学ぶ」(Greco 2005: 24) ことを要求する。つまり私たちは、知覚の限界や技術の発展を指標とするのではなく、むしろ対象やプロセスの複雑さ自体に内在する、知ることの不可能性を認識論に組み込むことを学ばなければならない。

5. 結論 (80)

- もしフェミニストが、自然や文化が発展し進化する際の多様な再帰的相互作用を認め、複雑な因果関係を捉える方法を理論的に見出すことができれば、本質主義を批判する概念的手段を手にすることができるかもしれない。
 - 因果関係の複雑さを認めるには、誤帰属 misattribution の問題（「原因を間違っ
- 誤帰属の観点においては、本質主義を悪意のある誤認とみなし、生物学と文化の間のいかなる関係も否定することが要求される。これに対して還元主義の観点は、本質主義を、多くの原因を単一の直線的なものに還元することとして考える。後者は、因果関係の単純化を拒否し、生物学と文化の間の複雑で創造的で、そして時に驚くべき相互作用の特定と精緻化を志向する。これは、緩慢で困難な作業かもしれないが、この営みにおいてこそ、フェミニストが培ってきた批評的・政治的スキルが発揮されるに違いない。